

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPOINT
2008 VOL.6

contents

極 研究&教育
Current topics in research and education

人 時の人
People in the news

楽 学生生活
Campus life

技 最新医療の紹介
Latest developments on the medical front

和 お知らせ
Information

学内保育所「さくら保育所」がオープンしました

桜の花が満開の4月1日、名古屋市立大学「さくら保育所」がオープンしました。この保育所は、大学の中期目標に掲げる、労働・研究環境等の整備、女性教員の増加を図るための具体的施策として、学内の全教職員及び学生の保育ニーズに応えるために、川澄キャンパス西棟に設置されました。

さくら保育所では、医師を始めとして、夜間勤務を行う教職員等の子育て支援のために、夜間保育(24時間保育)を行える環境が整備されています。また、病児や病後児にも対応した保育を実施できるよう病児・病後児専用の保育室を設置するとともに、専任の看護職員を配置しています。さらに、一時保育や延長保育などの保育ニーズにも対応し、多機能で柔軟な保育所運営となっています。

施設面では、保育所全体の床面積は320㎡と室内環境も良く、雨の日などにも保育所内で遊べるように保育室とは別に広いプレイルームを設けるなど、子供達が楽しく快適に過ごせるような工夫が随所に施されています。

保育所の運営で最も大事なことは、子供達が毎日健やかに楽しく過ごすことができ、質の高い保育を受けられることです。このために、大学全体の知恵と力によって、さくら保育所を素晴らしい保育所に育てていきたいと考えています。是非、これからも教職員の皆様のご支援・ご協力を宜しく願います。



▲少人数なので保育士さんを独占できます!



▲緑地も整備されました



▲雨の日でも遊べるプレイルーム



▲デザインウォールは芸術工学部の学生さんの制作

利用対象者

名古屋市立大学の教職員(非常勤職員を含む)及び学生(大学院生を含む)

保育日

開園日/月曜～土曜日 休園日/日曜日・祝日・年末年始

保育時間

基本保育 7:30～18:00

延長保育 18:00～21:00

夜間保育 21:00～翌7:30(週2日実施)

一時保育 7:30～18:00(定員内で事前予約制・1日単位)

病児・病後児保育 8:00～17:30(月～金のみ・定期通園児童を対象)

保育料金

通常保育

0歳児 月額5万円、1、2歳児 月額4万円、3歳児以上 月額3万円
(2歳目以降は上記金額の半額となります。また、保護者である父母の何れかが本学の学生の場合は、父母の収入に応じて割引が受けられることがあります)

特別保育

- 延長保育 1時間あたり600円
- 夜間保育 1回あたり1,000円
- 一時保育 1日あたり5,000円
- 病児・病後児保育 30分あたり500円

お問い合わせ

さくら保育所に関するお問い合わせは、事務局総務課

TEL (052) 853-8006へご連絡ください

「瑞医の由来」

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPOINT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出航し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

関連病院

市民病院がかわります!—東部医療センター

東市民病院—Q:病院の特色は?

名古屋市立5病院は東部医療センター(東市民、守山市民病院)、西部医療センター(城北、城西病院)、緑市民病院に改組され、本年4月1日に新設された名古屋市病院局(病院局長;上田龍三)に属しました。「新機軸を打ち出す!」を病院局の大方針として新たな船出をしたところです。

新機軸の一つはそれぞれが特徴を出して機能分担することであり、当院は既に稼働している心疾患センター、脳血管センターと、今後開設を検討中の呼吸器センターが高度専門治療部門としてバックアップする、24時間体制の2次救急医療施設として整備していく予定です。また研修センターを設置して市内有数の卒後教育病院を目指します。さらに女性医療者のキャリア推進を図るために24時間保育対応の保育室開設に向けての実質的な準備をしています。

本年度はService、Smile、Satisfactionの3Sを当院の共通理念としました。多くの研修医が集い、女性医療スタッフがそのキャリアを継続できる環境として当院を選んで働き、職員が救急医療に医の原点を見だし、災害時にも市民が安心して治療を受けられるいわゆる市民のための医療センターとして地域医療に貢献し、市立大学との連携による研究・臨床の実践施設となる…など、まだまだ私の希望は尽きません。

東市民病院は変革の途上にあります。「瑞医」読者の皆様には今後とも当院へのご指導、ご支援をお願い申し上げます。

名古屋市立東部医療センター長、東市民病院長 津田 喬子



守山市民病院—Q:病院の特色は?



この4月から、名古屋市病院局の発足にともない、当院は東市民病院とともに東部医療センターとしてグループ化されました。両病院の医師が相互に行き来して行う外来診療枠が拡大し、また、当院の外科および整形外科医師が東市民病院での手術を手伝うなど医師の交流が活発化しています。とは言え、泌尿器科、眼科、耳鼻いんこう科につきましては、相変わらず、大学の先生方の応援を頂き、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

さて、当院は市立病院整備基本計画のもとに、この4月から産婦人科病床の閉鎖、外科系手術の縮小を余儀なくされましたが、平成21年6月には、15床の緩和ケア病棟を開棟し、同年度中の病院機能評価取得、22年度の電子カルテ導入に向け、鋭意準備中です。最終的には、現在の許可病床200床から、95床体制になりますが、地域に根付き、市立病院との一層の連携を深めつつ、より特色ある病院になるべく努力してゆきますので、『瑞医』の皆様方のご協力をお願い申し上げます。

名古屋市立東部医療センター 守山市民病院長 横山 善文

学部教育

M1 医薬看合同カリキュラムスタート!

カリキュラム企画・運営委員会 委員長 浅井 清文 教授(分子神経生物学)にお聞きしました

Q1:M1 医薬看合同カリキュラムとは?

今年度から、1学年前期の系別教養教育カリキュラムとして企画されたもので、医学部と薬学部薬学科(6年制)の1年生を対象とする数名ずつからなる小グループ活動を基本とした医療系学部の専門導入教育です。看護学部の教員の協力もいただき、3学部合同で授業を実施しており、来年度からは、看護学部の1年生も参加することが予定されています。教員だけでなく、学内および市立大学病院の職員、近隣の医療施設も含めた多くの方々の協力を得て実現しました。

カリキュラムの内容は、医療に関する講義、ボランティア論の講義、医療面接のロールプレイ、医療現場に必要な基本的介護技術や心肺蘇生法の実習、医療現場体験、透析施設見学を実施するとともに、各グループが独自のテーマについて調査・研究を行い、授業の最後の時間には、その成果を発表します。

Q2:ねらい・特徴は何ですか?

入学後早期から、医療現場にふれ、医療問題に関心を持つことで、その後の専門教育へのモチベーションを高めるとともに、学部の枠を超えた混成グループによる活動を通して、現在の医療・福祉活動で求められているチーム医療に必要な資質と医療人としての心構えを育成することを目的としています。

このようなカリキュラムは、医療系の3学部が揃っている名市大だからこそ実現できるものであり、卒業後、それぞれの専門職についたときに、チーム医療を支え、真に患者さんの人生を支援することの出来る人材を送り出したいと考えています。



A 看護学部の実習室を借り、看護の基本的スキルを体験。写真は患者さんの移乗・移送体験。ベッドからストレッチャーに移します。

B 手洗い実習。綺麗に洗ったつもりでも…特殊な光源にあてると汚れが光って見えます。

C 「グループワーク」医療の現場はチームで行われます。課題を通して、チームワーク、リーダーシップ、効率的な作業の進め方を学びます。

研究者紹介



Naoaki Harada

原田 直明 (はらだ なおあき) 展開医科学 准教授

専門:血液学、抗加齢医学(テーマ:可食成分や薬剤による
インスリン様成長因子-I産生促進作用を介した生体防御機構の解明)

インスリン様成長因子-I (IGF-I) は成長ホルモンの作用発現物質で、細胞の生存、増殖、分化及び再生に不可欠である。我々の研究グループは、知覚神経刺激によりIGF-Iの産生が増加することを見出した。さらに、ほ乳類では、網膜にのみ存在し、生物時計の補助機能しかないと考えられたクリプトクロムが、知覚神経にも存在し、青色光により刺激されるとIGF-I産生が増加することを見出した。また、青色光刺激により、脊髄損傷ラットの神経再生が促進されることを突き止めた。この青色光効果は、iPS細胞と共に、将来の再生医療の新たな戦略となるであろう。

近年の論文: Crit Care Med. 36 (3):971-4 (2008), Growth Horm IGF Res. 17 (5):408-15 (2007),
Neuropharmacology 52 (5):1303-11 (2007). Gastroenterology 131:1826-1834 (2006).



Midori Shimada

島田 緑 (しまだ みどり) 細胞生化学(第二生化学) 特任助教

専門:細胞生物学(テーマ:癌、老化細胞におけるクロマチンの構造と機能)

私は“細胞分裂の基本的な機構を理解しその知見を発展させることで、異常な分裂を引き起こす癌への治療法を見出せるような研究がしたい”と大学院生の時から一貫した気持ちで研究に取り組んできました。現在はクロマチンと呼ばれるDNA高次構造や、クロマチンを構成するヒストンの翻訳後修飾に興味を持っています。癌の発生や老化と関わるヒストン修飾の変化を明らかにすることで、これらを標的とした効果的な癌の治療薬を開発できないか? iPS細胞に、クロマチン修飾タンパク質の機能を制御することで老化を誘導できれば安全面における課題を克服できないか? これらを目指し、学部生、大学院生とともに楽しみながら、研究に没頭しています。

近年の論文: Cell. 132: 221-232 (2008), The EMBO Journal. 27: 132-142 (2008),
Cell Cycle. 7: 1555-1559 (2008)



Miho Nozaki

野崎 実穂 (のざき みほ) 視覚科学(眼科学) 講師

専門:眼科学(テーマ:眼内血管新生、緑内障、網膜硝子体)

眼科領域では、加齢黄斑変性症(AMD)が、中途失明原因の上位になってきており大きな問題となっています。AMDは、もともと血管のない網膜黄斑部に新生血管ができる病気ですが、その病態は完全には解明されていません。留学先のケンタッキー大学では、角膜にはなぜ血管がないのか? その謎を解く研究を行ってきました。その研究に続く次のステップとして、黄斑部にもなぜ血管がないのか? AMDはなぜ、血管のない黄斑部にだけ血管新生が起きるのか? その観点からAMDの新たな治療法が確立できないか研究中です。

近年の論文: Nature 452:591-597 (2008), Nature 443: 993-997 (2006), J Clin Invest. 116: 422-429 (2006)



Hiroko Yamashita

山下 啓子 (やました ひろこ) 腫瘍・免疫外科学 准教授

専門:乳腺内分泌外科、乳癌の診療(テーマ:乳癌のエストロゲンレセプターとホルモン療法)

エストロゲンレセプターは乳癌の発生、進展の根幹をなすものであり、乳癌のホルモン療法はエストロゲンレセプターを標的とする最も歴史のある分子標的治療です。教室の内分泌研究班の長期にわたる研究テーマであり、これまでのトランスレーショナルリサーチの成果は世界の乳癌研究にインパクトを与えています。最近、乳癌におけるエストロゲンレセプターの発現調節メカニズムの解明と新規ホルモン療法剤の開発、エストロゲンレセプター陽性/陰性乳癌の発生メカニズムの解明、エストロゲンレセプターのリン酸化とホルモン療法抵抗性についてなどの基礎的臨床的研究を行っています。

近年の論文: Cancer Res (in press), Endocrine-Related Cancer (in press),
Endocrine-Related Cancer 13:885-893 (2006)

OB 訪問



土屋 隆氏
(輝山会記念病院理事長)

Q:これからの医療はどうあるべきでしょうか？

厚生省の医療制度改革関連法案の審議に参画して感じたことは、現場からの草の根的意見に基づく、何時もぶれない、確固とした統一見解を示すことが必須であるということです。当局も医療政策のプロ集団です。着々と練ってきた政策(案)を時宜を窺って出していきます。一例として、今年度から、「特定健診・保健指導」が始まりました。唐突な印象を受けますが、実は、25年前に、時の厚生省保険局長(後に次官)が、「医療費亡国論」とともに「医療費効率逓減論」を唱え、「予防、健康管理、生活指導などに費用を投入することが効果・効用が高い」、と既に政策方針を示唆しているのです。介護保険制度の導入とともに、今や「医療」を「保健・医療・福祉」と広義に解釈して、医療提供者には、保健・医療・福祉サービスをシームレスに提供するという意識改革とその体制整備が求められているといえるでしょう。

昭和37年名市大卒業 名市大第二外科・(医)輝山会記念病院理事長・(社)日本医師会常任理事・内閣府「食品安全委員会」専門委員
厚生労働省「社会保障審議会・医療部会」委員・厚生労働省「厚生科学審議会・地域保健健康増進栄養部会」委員



中野 佐上氏
(中野循環器内科)

Q:大学に期待することは？

1983年に厚生省保険局長が唱えた「医療費亡国論」に端を発して医学部の定員は削減され、2004年に新卒後臨床研修医制度が導入されるに至って、医師の絶対数が当然の如く不足し、大学から臨床研修医が激減しました。対応策として地域医療の要である関連病院から教室員を帰局させたため、関連病院から勤務医が居なくなりました。名古屋市の中でも、間違いなく地域医療崩壊が進んでいます(欠員があったり、閉鎖される科も少なくありません)。大学院医学研究科として研究面で頑張っていることは、とても頼もしく、喜ばしいことと思っています。臨床面でも広く、深い活躍を学生に知ってもらい、大学病院或いは関連病院での卒後臨床研修が充分出来る魅力と環境をつくって頂きたいと望んでいます(医学博士より専門医の取得を望む人が増えています)。関連病院が単に赤字病院だから切り捨てるのではなく、その地域で医療に携わっているOBの意見や要望にも耳を傾け、大学及び病院全体で知恵を出し合い、解決策を作成し、この難局を乗り切りたいと心より願っています。

昭和44年群馬大学医学部卒業。昭和45年名市大第一内科入局ののち、第三内科に異動。平成4年緑区で開業。現在、名古屋市医師会理事、名古屋市医師会看護専門学校副校長、名市大内科同門会会長、瑞友会理事。

文科省再生医療の実現化プロジェクト

「脳室周囲白質軟化症の幹細胞治療の実現化」研究チーム 始動!

このたび本学は、文部科学省「再生医療の実現化プロジェクト」幹細胞治療開発領域の実施機関に選定され、6月より新しい研究を開始しました。本学小児科が長年研究してきた脳室周囲白質軟化症に着目して、1) 内在性幹細胞による再生、2) 細胞移植治療、3) 移植細胞の腫瘍化防止の三項目について集中して取り組むため、再生医学・新生児小児医学・細胞生化学・脳神経生理学・分子神経生物学の共同研究チームを結成しました。(主任:再生医学 澤本和延教授) 写真(右)は第1回の研究会議に出席したメンバーで、左から三角吉代、浅井清文、青山峰芳、飛田秀樹、戸薊創、澤本和延、中西真、金子奈穂子、加古英介(敬称略)です。独創的な再生医学研究を名市大から発信できるよう頑張っています。



口腔外科学分野の紹介

診療科から、医学研究科の口腔外科学分野として新たな一步を踏み出しました。学制上、医学と歯学は分かれています。歯学は医学そのものであります。医学部、薬学部、看護学部を有する当大学に歯学教育が加わったことで、一貫した医学教育の体系が完結しましたことは、医学医療の発展にとってその恩恵は計り知れません。期待に応えられるよう努めて参ります。

今後の抱負

今まで培ってきた独自の研究をさらに発展させ、より質の高い医療を提供して他大学にはない特色ある教室づくりに邁進いたします。一層のご指導ご鞭撻ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



横井 基夫 教授

学生生活

別れと出会いがありましたー卒業式&入学式

3月ー70名の卒業生が名市大を巣立っていきました。今まさに、医師としての第一歩を踏み出している彼ら、初心を忘れず、いつの日か母校名市大を誇りに思い、支え、活躍してくれることを期待しています。

4月ー今年も初々しい80名の新入生を迎えました。入学式後には、新入生の保護者を対象に、大学説明会・施設見学会を実施し、92名の参加をいただきました。研修室、中央診療棟のヘリポート、図書館を見学した後、カリキュラムや学生生活についての説明を行いました。医学部長からの「わが子のように厳しくも温かく育てます」の言葉に、参加者からは「百聞は一見にしかず、で大変ためになりよかった。先生方のお話を伺い、親子共不安がありました、かなり解決されました。」「この大学を選んで良かったと思いました。」等の感想をいただきました。また、4月9日には医学部の新入生歓迎会が行われ、上級学生・教職員あわせて約300名が集まり、まだ緊張の残る新入生も積極的に教員や先輩と交流を深めていました。



- A センチュリーホールで行われた卒業式の様子。
- B 4月5日保護者説明会。普段あがることのないヘリポートを見学。
- C 新入生歓迎会。上級生、教員入り混じり熱気があふれる会場。

クラブ活動紹介

第1回 剣道部



こんにちは剣道部です。僕たちは山の畑キャンパスで週四回稽古をしています。剣道部は創部70年以上の歴史ある部です。現在の部員は全学部で16名と少ないですが、一年を通して多くの大会があり、入賞をめざしています。剣道は、なによりも礼儀作法を重んじるスポーツです。剣道を学ぶということは、剣の理法を学ぶことを意味します。つまり、剣の理法の奥にある武士の精神を学ぶことが重要で、これが剣道において「人間形成の道」と言われています。名市大剣道部は他大学との交流もあり、稽古はきついですが、みんな明るく元気にやっています。興味のある学生や先生方、ぜひ一度のぞき(稽古)にきてください。お待ちしております。

学生のページ

「オリター」を知っていますか？

名古屋市立大学では、入学式から一週間ほど新入生歓迎期間があります。この期間中に新入生は、授業の準備や合宿、歓迎パーティーなどを通して同級生との仲を深め、学校に慣れていきます。この新入生を誘導したり、レクリエーションを計画したりして期間中に新入生の手伝いをするのが「オリター」です。オリターはほとんどが新二年生で、この一週間のために何ヵ月も前から準備をします。

今年は、話し合いの日程が合わなかったり、案がまとまらなかったりとなかなか準備が進まず、新入生歓迎期間中でもまだ準備が残っていましたが、なんとか成功させることができました。新入生歓迎期間の終わりに「来年は自分たちがオリターをやって、後輩を歓迎したい」と、新入生から言われたことが一番の喜びでした。合宿では体育館でクラス対抗レクリエーションをしたり、新入生歓迎パーティーでは、グループ単位でクイズ対決などを行いました。このオリター制度は、何十年も前からあるもので、この良き伝統をこれからも残していきたいと思っています。



電氣的に神経機能を調整する

— 脳深部刺激療法(脳外科)&脊髄刺激療法(麻酔科) —

脳神経外科と麻酔科は協力体制をとり、中枢神経疾患に対するひとつの治療法として、脳深部刺激療法あるいは脊髄刺激療法を行っています。これらは、電氣的な刺激によって神経機能を調整し、症状を緩和しようという治療法です。

パーキンソン病の治療は薬物療法が基本ですが、薬物のみで症状のコントロールが困難となった患者さんに対して、最近では脳深部刺激療法(DBS)が行われています。DBSは手術により脳に設置した電極からの電気刺激で神経機能を調整する治療法です(図1)。脳神経外科では神経内科の協力の下で既に100例以上のパーキンソン病に対してDBSを行って良好な結果を得ています。DBSはその他ジストニアや本態性振戦などの不随意運動症の治療に対しても行われています。また、海外では強迫神経症やうつ病などの精神疾患への応用も始まっており、今後の発展が期待されています。

一方、脊椎手術後の痛みや外傷後の神経損傷に伴う痛みなどの難治性疼痛に対して、脊髄刺激療法(SCS)が行われています。これは、DBSと同様の電極を硬膜外腔に挿入します。弱い電流を流すことにより、痛みの信号が脳に伝わりにくくなることを利用して、痛みを和らげる治療法です(図2)。世界では約15万人の方がこの治療を受けており、近年日本でも盛んに行われるようになりました。麻酔科では、脳神経外科の協力を得てSCSを行っており、比較的良い結果を得ています。今後、様々な難治性疼痛に対する治療法として、SCSはより身近な治療法になっていくと思われます。

今後も脳神経外科と麻酔科は、臨床と研究において協力体制を維持し、当該分野の発展に力を入れていきたいと考えています。

(担当 脳神経外科:梅村淳、麻酔科:薊隆文)



「病院機能評価(ver.5)の認定を取得しました」

本院では、昨年度「(財)日本医療機能評価機構」による病院機能評価(ver.5)を受審し、本年2月18日付けでその認定を取得しました。病院機能評価とは、同財団が設定した評価基準に基づき、中立的・客観的な立場で医療機関の活動を現地調査や書面審査を通じて総合的に評価するものです。本院が受審したver.5では、「病院組織の運営と地域における役割」をはじめ7分野について、患者さんの権利を尊重しているか、診療・看護が安全・確実に行われているか、施設・設備は患者さんの利便性に配慮されているか、病院の管理・運営体制は合理的か等々約600項目について評価を受けました。審査の結果、医療の質に関わる「医療提供の組織と運営」、「ケアプロセス」については高く評価されるなど、大部分で適切である旨の評価を受けました。このように大学病院で、留保事項なく認定される事例は少なく、非常に名誉なことだといえます。受審の効果・利点としては、「診療・看護の一定レベルの確保の確認」、「患者さんに安全で良質な診療・看護を提供していることの証明」、「職員の自覚と意欲の一層の向上及び経営の効率化の推進」、「院内ルール・規定のマニュアル化、業務の標準化及び品質の確保」及び「病院自らの客観的位置づけの把握、改善すべき目標の具体化、現実化」などが挙げられます。今後は、5年後の更新を見据え、今回の受審を契機に整備された院内の環境や運用等の維持・改善及び効率的で質の高い病院運営に努めていくことが必要となります。なお、評価の詳細につきましては、同財団ホームページ内の「病院機能評価結果の情報提供」に掲載されております。



(HPアドレス<http://www.report.jcqhcc.or.jp>)

ご紹介

名誉教授のご紹介—ますますのご活躍を！



機能解剖学
そじ つよし
曾爾 彊 先生

先生は、昭和46年3月に東京慈恵会医科大学医学部を卒業され、同大助手、福岡大学医学部助教授を経て、平成4年10月に本医学部教授に就任されました。学生に対し、解剖学は医学のバックボーンであること、医師として専門科目も大事だが、患者さんと接するには深い一般教養が必要であることを強く説かれました。ご自身の専門は視床下部-下垂体前葉系の超微形態学ですが、世界の歴史や日本の寺院建築等にも造詣が深く、その一端は最終講義で披露されました。

(機能解剖学 准教授 馬淵 良生)



臨床病態病理学
えいもと ただあき
栄本 忠昭 先生

先生は平成20年春、臨床病態病理学分野教授を退官されました。この間、大学病院では長年、病理部長として、全学関連では、総合情報センター設立に、また対外的には日本病理学会理事として御尽力されました。栄本先生は特に胸腺腫病理に造詣が深く、最新WHO分類では多くの項目で著者として貢献されています。現在も、病理診断、原稿査読、依頼講演に追われる御多忙な日々を送られており、“水泳と囲碁の時間を確保することが難しい”とお聞きしています。

(臨床病態病理学 准教授 稲垣 宏)

～卒業生からの贈り物～

医学部第52回(平成18年度)卒業生より、母校へ総額50万円余りを寄付という形で残していただきました。寄付金の用途については様々な意見がありましたが、一部教員有志のご寄付と合わせて、基礎教育棟前が夜間は暗くて歩きにくいという意見が多数寄せられておりましたので、基礎教育棟前に街灯を設置することになりました。今では暗くなりますと、病院玄関から南門までの道を街灯が明るく照らしています。

卒業生の未来も明るくと、願っています。



桜山の懐かしのお店紹介—第1回「白雅」さん

お待たせしました!学生時代、よく訪れたあの店、この店-今でも現役学生の憩いの場です。そんな懐かしのお店を紹介するコーナーです。

名市大山の畑キャンパスの裏に夜遅くまで煌々と光を放つ一軒の居酒屋があります。その名も「白雅」。駅前の居酒屋とは全く異なり従業員もおじちゃんとおばちゃんの二人だけ。どこの居酒屋よりも安いお酒と、どこの居酒屋よりも人懐っこいおばちゃんを求めて、何十年もの間多くの名市大の学生がこの店を訪れています。食べ物のメニューも非常に豊富で、定番メニュー以外にもその日のお勧めなども食べさせてくれます。また、調理に忙しくない時には、おばちゃんが名市大の歴史の語りべとなっていろいろな話をして楽しませてくれます。おじちゃん、おばちゃん、いつもありがとう。これからも体に気をつけて僕達の成長を見守り続けてください。



味のあるこの看板が目印。



おじちゃん、おばちゃんに会いたくありませんか?

紹介:医学部サッカー部

郡研究科長に紫綬褒章！



爽やかな春の心地よい風に乗り、川澄キャンパスに吉報が届きました。
研究科長の郡健二郎先生が、芸術や学問などで功績があった人に贈られる平成20年春の紫綬褒章を受章されました。
受章理由は、「現代人の10人に1人の割合で発症する尿路結石の原因となる遺伝子を発見し、予防法を開発した」功績によるものです。

郡先生は、それまでの「結石は尿中で形成される」という通説を覆し、腎臓内の組織から大量に現れるオステオポンチンなどの有機物質が、結石を形成する分子メカニズムを解明されました。

さらには、コレステロールの過剰摂取が結石の1つの要因であり、生活習慣病としての尿路結石は食生活の改善などにより再発率を大幅に低下させることにも成功されました。

臨床、研究、教育、研究科長等と多忙な毎日をお過ごしですが、市立大学の発展を願う熱き想いは、誰もが認めるところです。

今回の受章は、郡先生ご自身のみならず、本医学研究科・医学部の誇りと喜びです。

今後も、郡先生のより一層のご活躍を心よりお祈りし、確信しております。

平成20年度 第二期オープンカレッジ受講者募集！

今期は、麻酔・危機管理医学の祖父江和哉教授（「食事・栄養・代謝からみた健康と病気」）と細胞生化学の中西真教授（「がん治療戦略の新たな局面」）にコーディネーターをお願いしております。当オープンカレッジも多くのファンを得、毎年引き続き受講して下さる市民の方も増えてきました。今回は、食事や栄養の視点から健康や病気を考える講義と、がん治療の最前線に関する講義を市民の皆様へ提供していきます。

科目No.3

「食事・栄養・代謝からみた健康と病気」
9/5(金)～10/24(金)【期間中、毎週金曜日開講】

科目No.4

「がん治療戦略の新たな局面」
9/17(水)～11/5(水)【期間中、毎週水曜日開講】
※両科目とも時間：18:30～20:00 90分授業で週1回、全8回で構成。

申込み方法

往復はがき又は
Eメールによる応募を受付けます。

記入事項 希望科目、氏名(ふりがな)年齢、住所・電話番号、職業、応募の動機

郵送先 〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1 医学部事務室宛

Eメール igakubuoc@sec.nagoya-cu.ac.jp

受付締切 8/22(金)消印有効

TEL 052-853-8077

詳細は担当までお問い合わせください。

広報委員のご紹介

新年度が始まり、3年目を迎える本誌も大幅リニューアル!8Pになりました。これまでのコンテンツに加え、学生によるページ、クラブ活動紹介、懐かしのあのお店紹介!など、今まで以上に皆様に参加していただける広報誌を目指してまいります。広報委員もメンバーを増やし、POWER UP!「これ紹介してよ!こんな話題があるよ。」と気軽に声をかけてください。よろしくおねがいいたします!

広報委員

祖父江和哉(麻酔・危機管理医学教授)
澤本和延(再生医学教授) 飛田秀樹(脳神経生理学准教授)
尾崎康彦(産科婦人科学病院准教授) 榎原毅(労働生活・環境保健学助教)
坂野、大久保、藤井、佐々木(以上4名事務スタッフ)

ひとつこと☆メッセージ募集!

本誌では、皆様からの一言メッセージを募集します!ご無沙汰している同級生に、恩師に・・・ワイワイ楽しいお便りお待ちしております。ほっと和む「名市大人のつづやきコーナー」をみなさんと作りたいと思います。

例えばこんな一言を、

研究者紹介に載った同期・先輩へ。「おまえも、がんばってるみたいやん。」
ごぶさたしている同窓生への近況を。「最近、腹が出てきました。」
新米医師のつづやき、女性医師必見!ウチの家事両立法!「ここが手抜きポイント!」
などなど、必要事項を記入の上、葉書かe-mailで下記までお送りください。(注:次回掲載は10月号です)

1.一言メッセージ(30字以内) 2.卒業年度 3.お名前(ふりがな) *匿名希望またはペンネームでの掲載をご希望の場合はその旨をお書きください。*4.住所 5.電話番号またはE-mailアドレス

《受付》〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1 E-mail:igakujimu@sec.nagoya-cu.ac.jp
名古屋市立大学医学部広報誌「一言メッセージ」係宛

お送りいただいた個人情報については、お便りの採用に関する応募者への問い合わせ、確認以外の目的で使用いたしません

広報誌：瑞医(ずい)

発行：名古屋市立大学大学院医学研究科・医学部
〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1
TEL (052) 853-8077 FAX (052) 842-0863

URL <http://www.nagoya-cu.ac.jp>

※次号の発行は平成20年10月下旬発行予定です。【年3回 2月・6月・10月】

☒
我こそは
通信員!

広報誌「瑞医」へ最新的话题をお届けして下さるサポーター大募集!「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。我こそは、という方は、igakujimu@sec.nagoya-cu.ac.jp
または医学部事務室 佐々木まで